

中で、気管支が腫れることで、気管支の筋肉がけいれんして、気管支が縮んだり、管の中に入らなくなったり、気管支の筋肉がけいれんして、気管支が付いたりして空気の流れが悪くなることで息苦しさが出ます。この状態を「ぜんそく」と言います。ぜんそくは、高血圧などと同じ慢性の病気なので、毎日、薬を使うことがとても大切です。

気管支が腫れ息苦しく

発作用の薬を使うと症状は

一度は目にしたり、耳にしたりしたことがあると思います。正式には気管支ぜんそくと言います。子どものぜんそくはアレルギーとの関係がつきりしており、成長とともに治ってしまうこともあります。今回は、大人のぜんそくについて説明します。

徳島大学病院
呼吸器・膠原病内科医師

吾妻 雅彦
元気のヒント

△91△

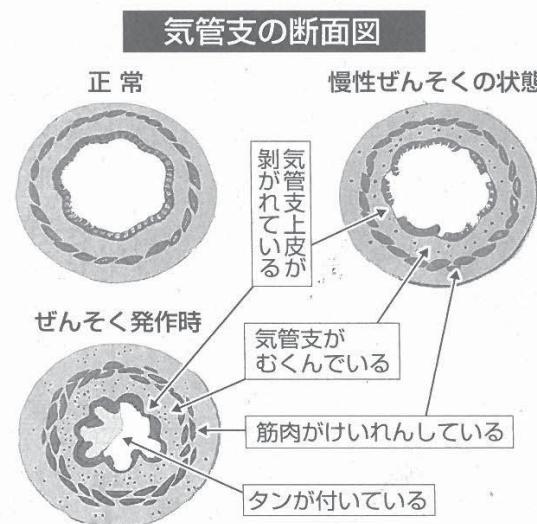
しさなどが現れる病気です。

(図)

診断については①せき、ぜんめい、息苦しさの症状がある②気管支が狭くなったり、元の太さへ戻つたりする(可逆性の気流制限)③ちょっととした刺激でぜんそくの症状が出る(気道過敏性の亢進)④気管支ぜんそく似ている別の病気ではない—以上の4点が確認できると、ぜんそくと考えよいとされています。

最近注目されているCOPD(慢性閉塞性肺疾患)は、ぜんそくとよく似ていて区別が難しい場合や、ぜんそくに併しているときもあります。治療の基本は、吸入ステロイド剤をきちんと使うことです。発作という分かりやすい症状があるため、発作の時だけ病気と考え、発作用の薬だけを使う人もいます。気管支ぜんそくは、高血圧などと同じ慢性の病気なので、毎日、薬を使うことがとても大切です。

ステロイド剤で発作予防



この結果、ぜんそくでなる人は、2013年には1728人まで減っています。副作用を気にする方もいますが、ぜんそくで使う吸入ステロイド剤は飲み薬に比べ、非常に少ない量です。また、飲み込んでしまっても分解されないので、ステロイド剤として体内に広がらないよう安全に配慮して作られています。使ったときに効果が実感できないのと、吸入するのにコツがないため、治療をやめる人がいるのが問題になっています。飲み薬やテープの薬もありますが、吸入ステロイド剤に追加して使うことが勧められています。

(第2土曜日に掲載)

気管支ぜんそくであることが分かれば、息苦しくなくても、吸入ステロイド剤を毎日きちんと使って治療するのが大切だと考えられます。

取れますが、次の発作を予防できません。20年以上前、発作用の薬を定期的に使う治療目標になりました。気道炎症を抑えられる力の強いステロイド剤を吸入する治療が広がりました。ぜんそくで亡くなる人は年間600人を超えていました。発作自体が気管支を傷付けるので、気道炎症を抑え、発作を起こさせないことが治療の目標になりました。気道炎症を抑える力の強いステロイド剤を吸入する治療が広がりました。